



Title	オホーツク文化前期の地域開発について
Author(s)	天野, 哲也
Relation	オホーツク文化形成期の諸問題 = Problems on the formative stage of the Okhotsk culture
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 1, 69-80
Issue Date	2003-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38402
Type	departmental bulletin paper
File Information	no1_p69-80.pdf



オホーツク文化前期の地域開発について

天野 哲也

The strategy for developing territory, taken by the Okhotsk people during the early stage

AMANO Tetsuya

Analyzing the archaeological data from Kafukai-5 site in Rebun Isl. etc., the author pointed out that the one group of the Okhotsk people first appeared from the "Core Area" southwestern coast of Sakhalin and worked there every year mainly during summer season living in temporary huts.

For the next step, intending to extend the work term into the cold season, the group constructed simple pit houses in Kafukai-5. Living in these simple pit houses people could work in any season, if necessary even in winter, but generally they returned to their home settlements in southern Sakhalin after working. Fish bones of *Pleurogrammus azonus* Jordan et Metz, *Gadus macrocephalus* Tilesius and *Clupea pallasii* Valenciennes found in small scale cultural layers No.VI and V in Kafukai-1 site, about 500m north of Kafukai-5, shows that people started winter fishing activity there. Remains of dogs and pigs in the cultural layers No.V might mean these animals were fed by fish during the winter season. Another group in Sakhalin found their way to Teshio or even to Okushiri Isl., the Southern most limit of their distribution, while Nemuro was the Eastern limit of their distribution in this stage.

Near the end of early stage, the Okhotsk people in Sakhalin moved their base from Kafukai 5 site to Kafukai 1 site and established new settlement, building permanent pit house No.2. Their main occupations were fishing and sea mammal hunting from autumn to spring season. Now they could keep many dogs and pigs by feeding them fish during the winter.

To sum up, in the early stage of the Okhotsk culture, people started to use new territory as a summer camp by constructing and living in the temporary hut. Next they kept and used the site as an all year round camp with simple pit house. Finally people established a settlement with permanent pit houses made of massive log pillars.

はじめに

さきに筆者は、礼文島香深井 5 遺跡における近年の調査の成果（荒川編 1997）などを検討して、オホーツク文化について北海道内でこれまで知られている限り、ここが最も古い様相をもつこと、そしてオホーツク文化前期を（天野 1979）Ⅰ・Ⅱに 2 分した場合、それが香深井 1 遺跡魚骨層Ⅵ・サハリン南西のモネロン島キタコタン 1 遺跡Ⅴ層とともにⅠ，すなわち前半（突瘤文段階）に位置づけられるものであることを結論づけた。また道

北部に進出したこのグループが最終末段階の鈴谷式土器をもつグループと接触したと推論した（天野 1998，天野・小野 2002）。

その後オホーツク文化前期に関して、香深井 5 遺跡の新たな調査の成果が刊行され（内山・藤澤・荒川編 2000），また従来想定されていた分布圏を遙かに超えた奥尻島で発見された青苗砂丘遺跡についても部分的に知られるようになった（皆川他編，2002）。これらの遺跡の性格，とくに居住の仕方に関する議論はオホーツク文化をどのようなものと理解するかと言う問題と密接に関わるので重

要である。

小論では、オホーツク文化の住居として一般的な堅穴ではなく、これまで論じられることの少なかったそれ以外の居住の形態を検討することによって、前期に展開された地域開発のあり方を考える。

Ⅰ 問題点

オホーツク文化の住居については大井晴男がまとめて検討している（大井 1979）。ただしそこで対象としているのは一般的な堅穴住居（以下単に、堅穴住居とよぶ）であり、その他の住居の形態があったのかどうか、もしあったとすればそれはどのような用途をもち、堅穴住居とどのような関係にあったのかには触れていない。

この問題に唯一これまで言及したのは山浦 清である（山浦 1979）。その主な論点はつぎの3つである。①オホーツク文化期には一般の大形堅穴住居とはべつに「小堅穴」が造られる。実例として弁天島西貝塚堅穴、稚内泊内1号堅穴、天塩川口基線3号堅穴や栄浦第2遺跡12号堅穴をあげた。これら「小堅穴」の特徴は、まず規模が1辺4mほどと小さく、構造的には、大形堅穴住居一般にみられる「砂場」[すなわち炉]や骨塚・溝・堅穴中軸上の支柱穴などを欠くことであるとした。②その用途として、民族例からみても、冬季の狩猟小屋ないし作業小屋が想定できるとした。③オンコロマナイ遺跡において台地上の堅穴住居3軒とともに台地下に造られた小形堅穴も同趣のものと考えられるので、「鈴谷期」（続縄文期）にすでにこの種の小形の堅穴は存在した¹⁾。

以上の山浦の理解をまとめると、オホーツク人は冬季に狩猟や作業のために小形の堅穴形式の小屋すなわち小堅穴を造った、その伝統は鈴谷式の段階にまでたどれる、とできよう。

小論で特に問題にしたい点は、小堅穴の性格すなわち、どのような状況で、どのような目的でこれが造られたか、堅穴住居とはどのような関係にあるのか、なぜ前期に多いのか、またこれら以外に住居の形態はないのか、である。この問題を考えるために、時期・位置・季節性・規模・構造・戸数・人口・集落・そして集団の系統などの面から「小堅穴」を検討する。

Ⅱ 「小堅穴」など

ここではオホーツク文化前期の堅穴住居以外のつぎの10例を検討する（表、図1）。

1. 香深井5遺跡（荒川編1997、内山・藤澤・荒川編2000）

香深井湾の南端部で、その背後の崖との間に形成された奥行き50mほどの小沖積面、砂丘上に遺跡は位置する（図2）。この沖積面のほぼ中央を流れる小沢を挟んで左岸に3軒、右岸に2軒いずれも前期ににふくめることが出来る「住居址」と一種の屋外炉「集石遺構」、墓壙などがみつまっている。報告年の下二桁を見出しに付けた番号で以下これら5軒を表示、検討する。

a 左岸

左岸部では「住居址」3例のほかに集石遺構や墓壙と考えられる遺構がみつまっている。

97-1号（図3）

Ⅳ層中で、長方形の炉を中心に確認された遺構である。踏み固められた面は認められたが、柱穴様のものの配置に企画性はみられず、明確な壁は確認されなかった。したがって、報告された方形の平面形と、1辺8m前後の規模も推定されたものである。これに伴う遺物も確認されなかった。これはなんらかの生活の場であろうが、住居であったか疑わしい。むしろ焚き火を中心とした活動の場ととらえるべきかもしれない。またこの面は粘土層で直接被われており、この面より下位に集石遺構Pit-14があり、また上位に次に検討する97-2号が位置する。

97-2号（図4）

1辺7m前後の方形の平面形をもつと推定された遺構である。深さは2cmとされ、きわめて浅い。方形の炉と、その配列がこれを囲む形であると判断される柱穴群が確認されているので、なんらかの住居である可能性が大きい。ここでは炉の近くで石器製作をおこなった跡や、まとまった土器などがみつまっている。この石器製作の状況は川尻北チャシ遺跡2号堅穴住居などと共通する。

この面より下位に97-1号と集石遺構Pit-26

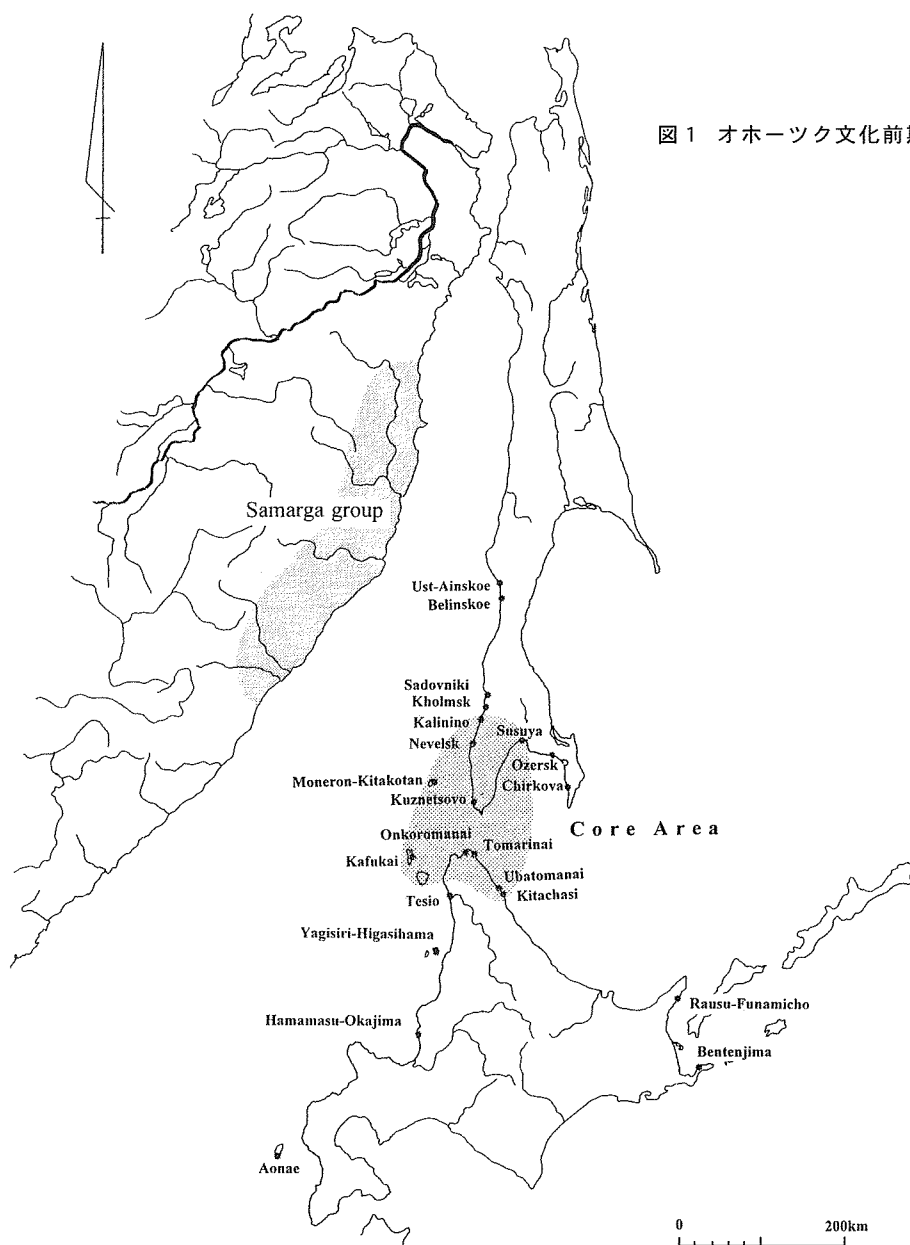


図1 オホーツク文化前期の主要な遺跡の位置

	仮小屋・仮設竪穴住居	長さ	幅	深さ	面積	炉	床構造	土器	活動
1	香深井5遺跡97-4号	6.4+	8.24	0.09	68	1.67×1.33×0.13	砂地	突瘤文、刺突文	
2	香深井5遺跡97-1号	8.4	7.8	0.04		あり		未詳	
3	香深井5遺跡97-2号	4.5+	7.4	0.02	55	1.57×1.00×0.06	炉：長軸直交	突瘤文、刺突文	
4	香深井5遺跡00-5号	5.0+	7	0.44	49	不明	粘土床2枚	刺突文	
5	香深井5遺跡00-4号	6.6	6.8	(0.42)	46	不明	粘土床・溝	刺突文、刻文	
6	天塩川口基線B遺跡1号	[5]		0.2		集石[1.25]		刺突文	
7	天塩川口基線A遺跡3号	5.3	4.4	0.4		1.2×0.65	記載無し	刺突文、刻文	
8	青苗砂丘遺跡H-1	8.6+		0.5+		未詳	粘土	刺突文、刻文	狩・採
9	泊内遺跡左岸1号	4	3.5	未詳		焼土	粘土	刺突文	
10	弁天島西貝塚1号	3.6+	3.45	0.4	12	0.3×0.2焼土		刺突文	

表 オホーツク文化前期の竪穴住居以外の施設

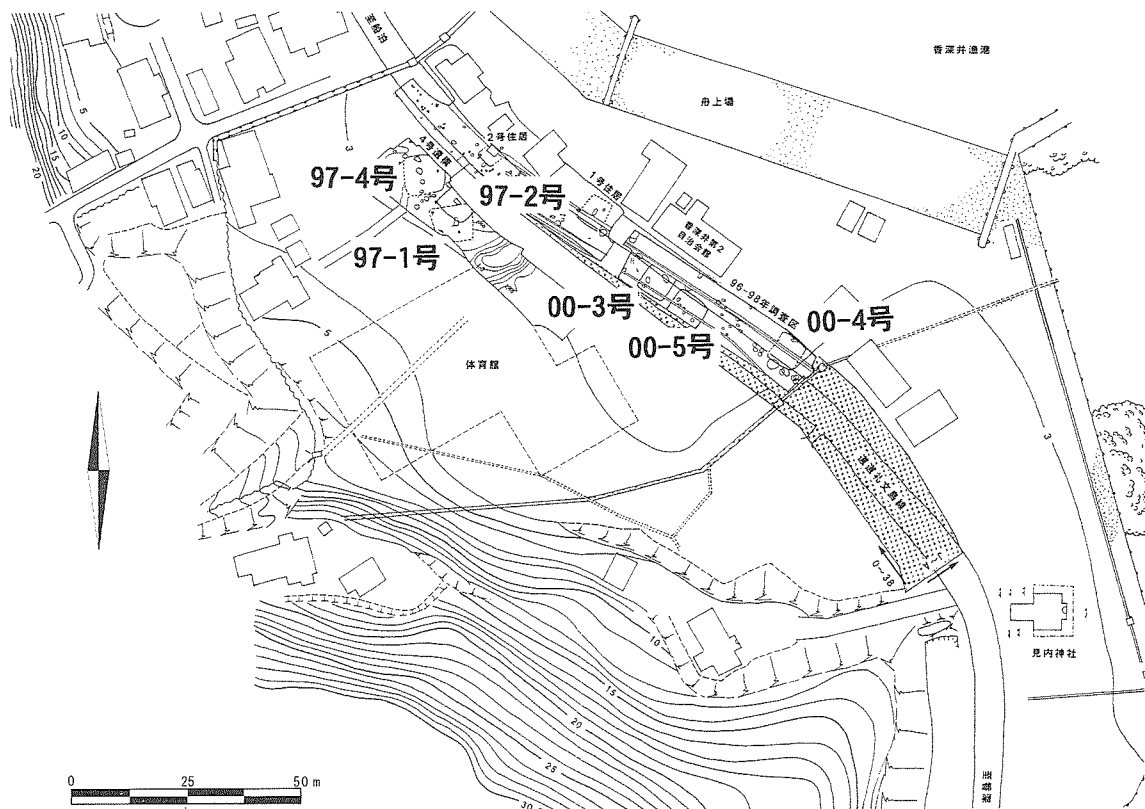


図2 香深井5遺跡（小野，2001より）

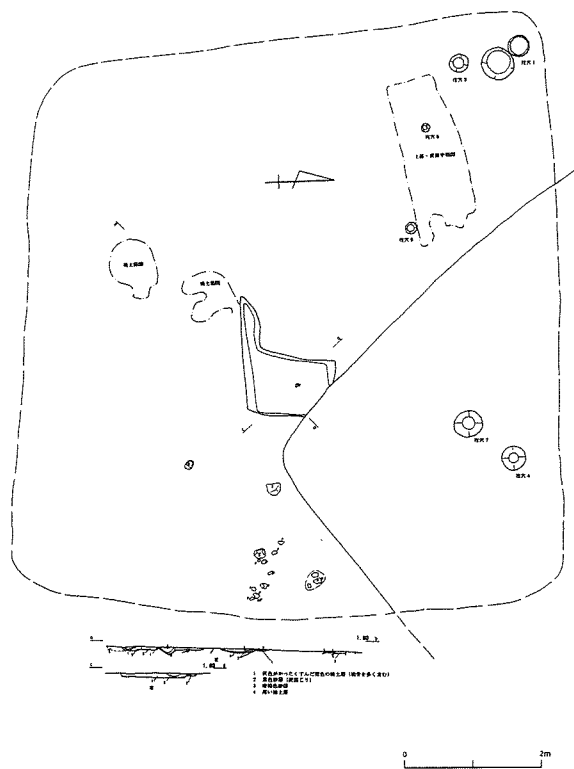


図3 香深井5遺跡 97-1号

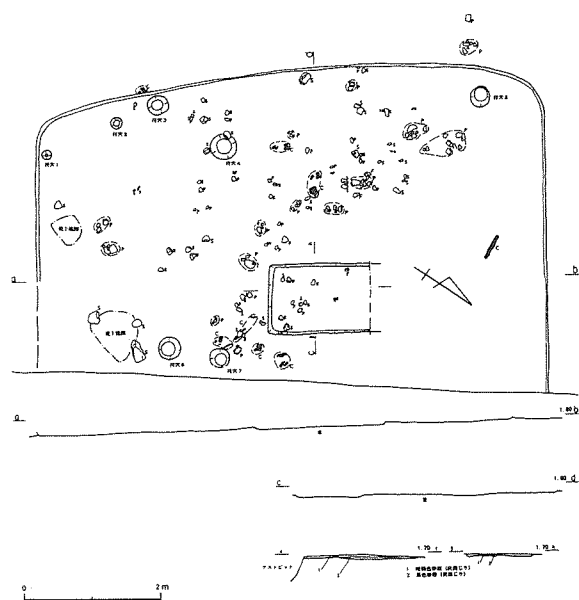


図4 香深井5遺跡 97-2号

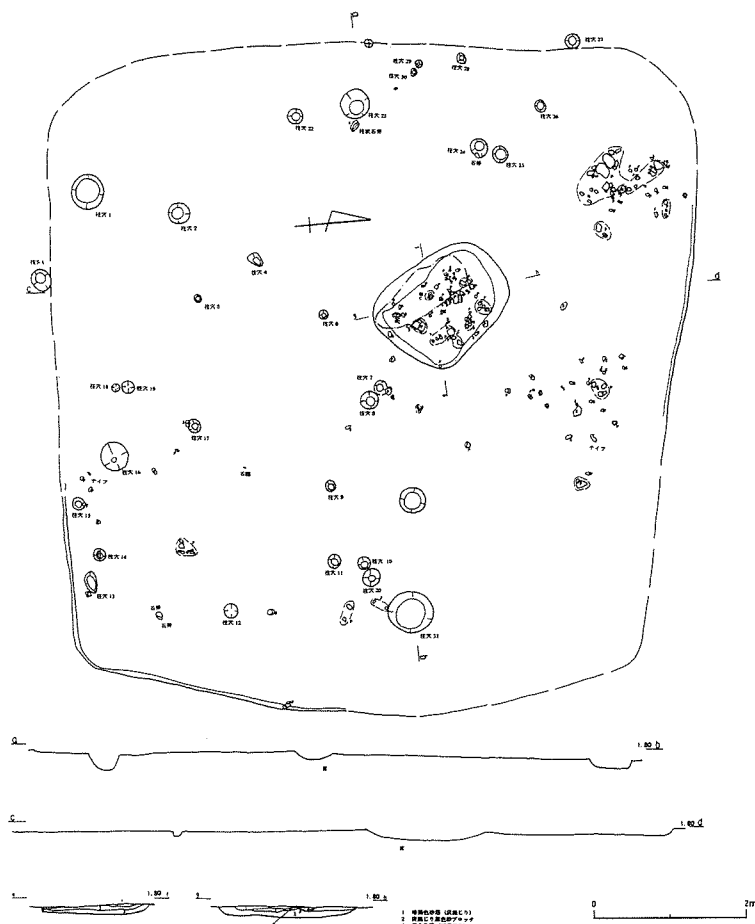


図5 香深井5遺跡 97-4号

がある。

97-4号(図5)

1辺8m余りの方形の平面形をもつと推定された遺構である。深さは最大で10cmとされ、浅い。しっかりした柱穴群があり、その配置は想定される壁に沿うものもあり、また主柱穴とみることができる穴が長軸上の両端、壁際に位置する。ただし隅丸方形の炉は、この長軸上にのらず、またその長軸方向もおよそ45°ずれる。炉の中に土器2点が、また炉の周囲でも土器などがみついている。石斧は、柱に掛けられていたのか、3点とも柱穴附近に位置し、この傾向は弁天島西貝塚1号例さらには常呂川河口遺跡12号竪穴の鉄斧例などと共通する。これが住居であることは認められてよいであろう。

さて、これら3軒のうち97-2号が97-1号に遅れることは切り合い関係で明らかである。また97-1号と97-4号は、間隔も4mほどあるので同時ないし近接した時期に存在したと判断できる。

そして97-2号と97-4号は、間隔が1m足らずと狭いので、同時的存在はむずかしい。結局、97-4号・97-1号→97-2号の変遷を想定できる。

なおここでは後北式土器片も見つかっているので、97-1号下のPit-14は続縄文文化期のものである可能性もある。

以上まとめると、この左岸では焚き火をともなう施設、さらに炉をもつ簡素な建物を用いて活動が開始された。報告者にしたがって後者を「仮小屋」とよぶ。97-2号・97-4号がこれにあたる。

またこの左岸では、2000年報告のpit-45以西のものをふくめて、集石遺構とよばれる炉もこの時期およびその前後に使われた。魚骨の層やそのブロックと漁網用の石錘が認められないことをあわせると、左岸で冬季中心の漁労が盛んであったとは考えられない。厳冬期外の季節の活動の場であったのであろう。

得られた土器はほとんど刺突文系であり、しかも突瘤文の比率が高い(50%前後)ので、この左岸での活動は、オホーツク文化前期の前半、I段階に位置づけられる。

ここには墓も造られており、層位的にこれらの仮小屋よりも新しいことが確認されているが、副葬品に乏しいためその時期を絞り込めていない。ただしこの左岸では前期以外の土器はきわめてわずかなので、これらの墓壙が時期的に前期のうち収まる可能性が大きい。

b 右岸

沢の西方で調査された住居3軒と集石遺構などを検討する。

00-4号(図6)

平面方形で6.6×6.8mの規模をもち、断面図でみると深さは40cm前後である。竪穴中央を横断する形に、床面積のほぼ半分におよんで攪乱されているが、床の全面に粘土を貼っているとみてよいであろう。粘土床の北東部に残る溝を縦溝と

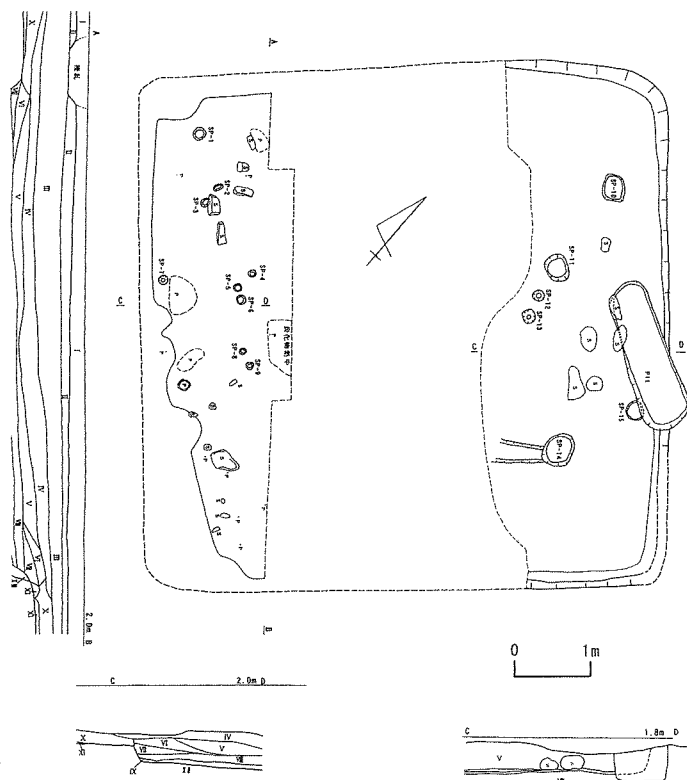


図6 香深井5遺跡00-4号

考え、また南東部の炭化物の集中を炉の奥部と考えると、竪穴の長軸は北東-南西すなわち海-山方向を指す。しかし壁沿いと長軸上の整然とした主柱穴群の配列は認められない。

00-5号(図7)

南西壁側が一部未調査であるが、00-4号と共通する平面方形を想定できるので、一辺7mほどの規模をもち、断面図でみると深さは40cm余りの竪穴である。床の全面に粘土を貼り、中央部に長方形の炉を設けたものとみてよいであろう。竪穴の長軸は北東-南西すなわち海-山方向を指す。柱穴は、壁沿いのものは直径10cmほどと細く、炉の両側に直径20cmくらいのやや太いものを配列している。主柱穴群の配列はみられない。

以上をまとめると、これらに伴う土器群は、その口縁部文様には突瘤文が顕著でなく、円形

刺突文が主であるので、前期後半に位置づけられよう。そのうち00-4号には刻文系土器もみられるので、00-5号に伴う土器が、掲載された円形刺突文例のみでなるのならば、それよりやや遅れる公算が大きい。いずれにせよ、熊本がその可能性を指摘したように(熊本2000:154)、オホーツク人は前期の半ばに左岸からこの右岸へ生活の場を移したのであろう。

またここでも広い範囲で集石遺構が20基かくみつかっている。多くは直径50-100cm、深さ20前後で、浅い掘り鉢形をなすものである。油煙がしみ込んだ礫がその中に詰まっており、脂っぽい炭化物に満ちた黒色砂が礫の間を埋めている。獣脂を燃やしたか、あるいは海獣の処理に用いられた施設であろう。

ここでは魚骨層あるいは魚骨ブロックはみとめられなかった。また石錘も発掘区で1点出土しているだけで、確実に前期に属するものは得られていないので、ここで冬季中心の活発な網漁がおこなわれていたとは考えられない。

なお中期には竪穴00-3号が00-5号のあった

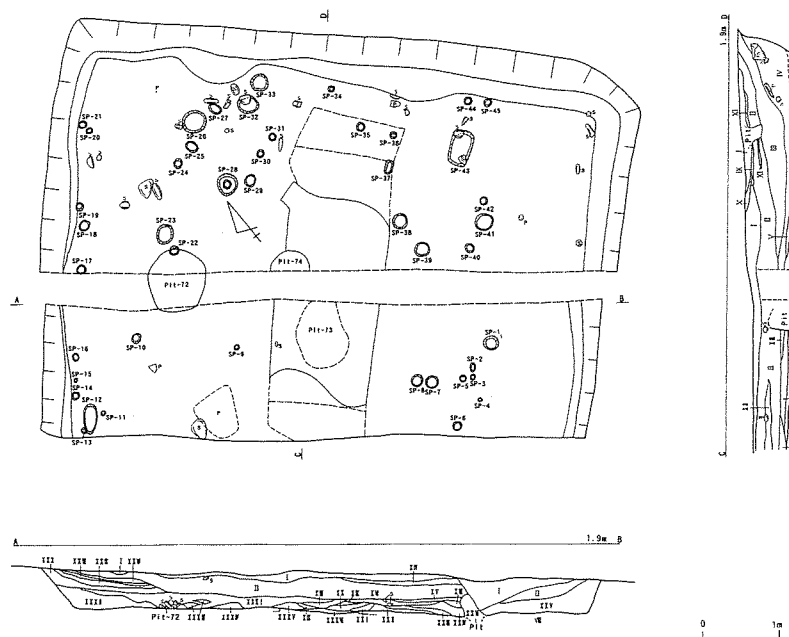


図7 香深井5遺跡00-5号

地点のすぐ脇に建てられている。
これは平面形が長方形をなすと推定される、幅 6.7m 深さ 25cm 以上の竪穴である。中央の炉を囲む長方形の部分を除き、床のほぼ全面に粘土を貼り、炉と側壁の中間附近に縦溝をもつ。柱穴は、壁際にはほとんど認められないが、縦溝に沿って等間隔に配列されている。

つまりこの香深井 5 遺跡では、オホーツク人の活動は前期前半に左岸で仮小屋に暮らす形で開始した。前期後半には右岸に移り、竪穴に暮らすようになった。あるいはこの頃から墓地は左岸に設けたのかもしれない。

その活動は前期を通じて海獣猟が主であり、冬季中心の漁労は活発ではなかった。

2. 天塩町天塩川口基線 B 遺跡 1 号

(加藤・前田・西田 1982)

内陸から海岸部に出た天塩川がほぼ直角にその流れを南に転ずるあたりの、左岸砂丘上に位置する。この遺構は地表からの深さが 70cm ほどの隅丸方形のくぼみとして確認され、すでに砂取りのために半ば失われていた。その規模の記載はないが、遺跡地形図でみると、一辺 5m 前後のものであったと推定できる。断面では約 20cm の掘り込み、すなわち壁が観察された。床面中央付近に、直径 1m 余り、深さ 50cm ほどのピットに礫の詰まった炉が見つかった。礫の間および炉底には多量の広葉樹の炭化物が認められた。この炉は、形態的には香深井 5 遺跡などの屋外で使用された集石遺構に類似するが、燃料が違うためであろう、礫も充填物も脂っぽくない。類例を知らないが竪穴内の炉とみておく。

床面近くの埋土中からはオホーツク式土器のみが出土し、掲載された口縁部 4 点はいずれも円形刺突文をもち、胴部 2 点もこれらと組み合わせ可能性が大きい。したがってこの竪穴を前期後半のものと考えて差し支えないであろう。

なおこれの南方 10m ほどのところに 10 × 8 m の方形の 2 号竪穴が存在するが性格は未詳であ

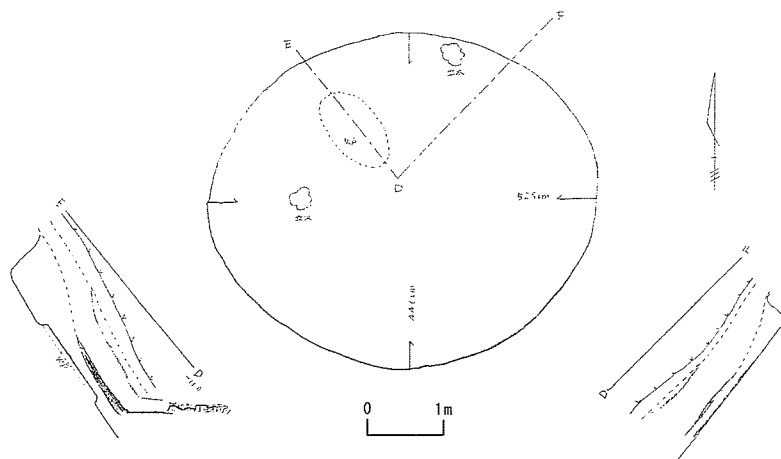


図 8 天塩川口基線 A 遺跡 3 号

る。ただしずれにせよ、この地点の利用状況が低密度であったことに変わりはない。

3. 天塩町天塩川口基線 A 遺跡 3 号

(河野 1964)

概報のみであるため詳細はつかめない。天塩川河口近くの左岸で、天塩川と、これに沿って北に流れるその支流トウツナイ川とに挟まれた砂丘上に位置する。遺構は平面形がほぼ円形で、直径 4.46-5.28m、深さは 40cm ほどであり、竪穴住居と記されたものである(図 8)。壁は垂直に近く、しっかりしていたようである。炉は、竪穴中央ではなく、壁との中間に位置する。柱穴や、粘土床・溝の有無などについては記載がない。

報告された遺物はオホーツク式土器口縁部 8 と同底部 8 および胴部破片である。口縁部文様の内訳は、円形刺突文 6、刻文 1、爪形文 1 であり、突瘤文を欠くことが注目される。共伴関係は未詳であるが、一括して前期後半から中期にかけの土器群とみることは充分可能である。

4. 奥尻町青苗砂丘遺跡 H-1 号

(皆川他編 2002)

遺跡は奥尻島南東端の海岸砂丘上、ワサビ谷地川河口近く右岸に位置する。試掘段階の報告なので全容は未詳だが、50cm ほどの掘りこみをもつ竪穴が確認され、断面図で判断すると、その規模は差し渡し 8m を超える(図 9)。この床面は

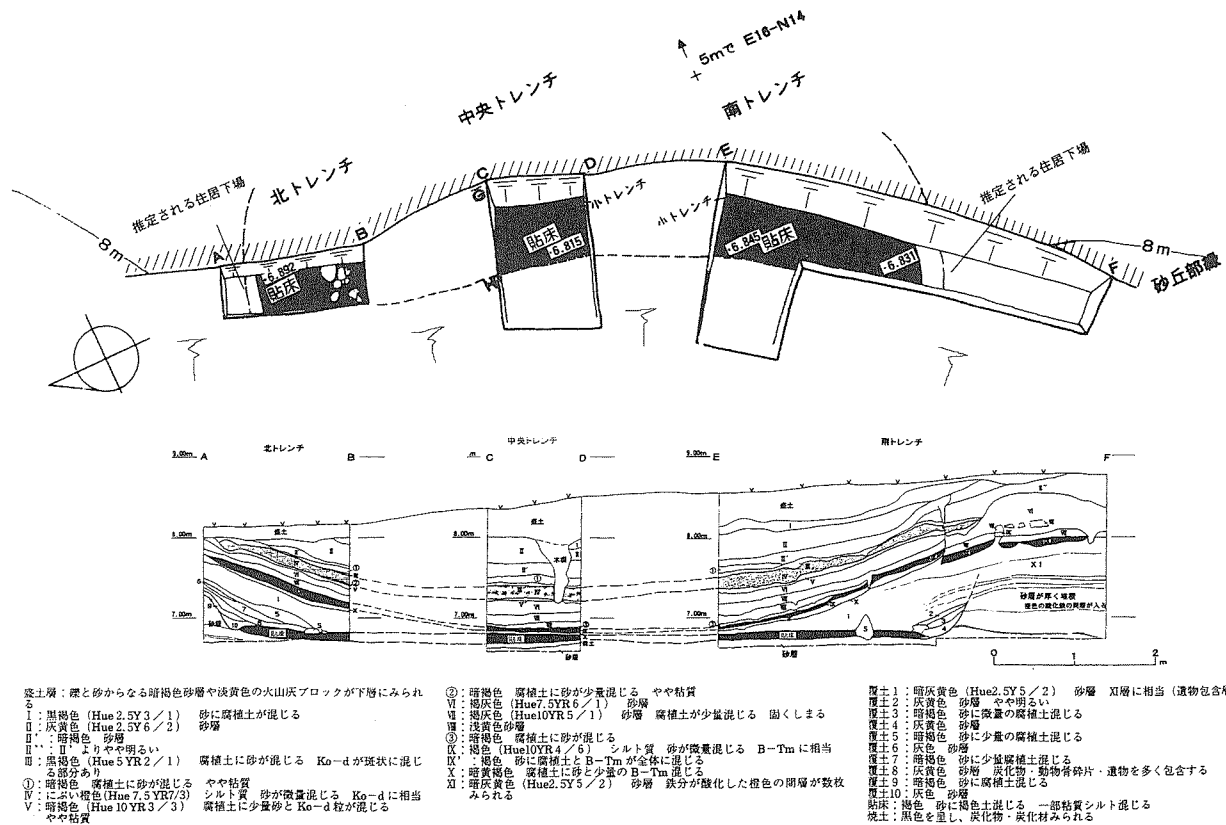


図9 奥尻町青苗砂丘遺跡

固く締まった砂であり、そこで土器や石器・石核などが出土している。得られた土器はすべてオホーツク式である。口縁部文様は、円形刺突文が主であり、突瘤文を含まない。また刻文もわずかだがみられるので、前期後半から中期にかけの土器群とみてよいであろう。

床面の下にも焼土がありフレイクが得られている。竪穴構築に先だってこの地点の利用が開始されていたことになる。

竪穴の北東20mほどのところの試掘坑で貝層の一端がとらえられた。出土した土器の様相は竪穴のものと共通性が高いようなので、両者はほぼ同時期のものとみられる。自然遺物ではアシカ・イルカ・ウニが同定されている。また魚類ではホッケ・タラを含むがニシンは認められないようなので、ここの利用は通年ではなく、冬季ー春季の間に中断するものであった可能性が高い。

5. 稚内市泊内遺跡1号 (佐藤編 1964)

遺跡は宗谷岬の南東5kmほどのところのオホー

ツク海岸、段丘下に泊内川によって形成された小沖積面の砂丘上、左岸に位置する。竪穴住居と報告されているが、壁は確認されておらず、また地表のくぼみも認められなかった。粘土を貼った床面の広がりと共に重なる遺物・炭化材の分布によって、長径5m、短径3.8mの楕円形に近い平面形が推定されている (図10)。焼土が2箇所あるだけで、明確な炉はみられなかった。深さ50cmにも達する柱穴が床の周辺部をめぐる形に配列されており、それらの上半部には炭化材が残っていた。さきの香深井5遺跡の仮小屋に類するものであったと考えられる。

床面から得られた遺物は土器のみであり、縄文式土器1を除き、すべてオホーツク式である。口縁部文様に突瘤文を含まず円形刺突文だけで成っているため、この土器群の時期を前期後半と位置づけられる。

右岸の砂丘上に竪穴のくぼみが20基あまり確認されているが、性格は未詳である。

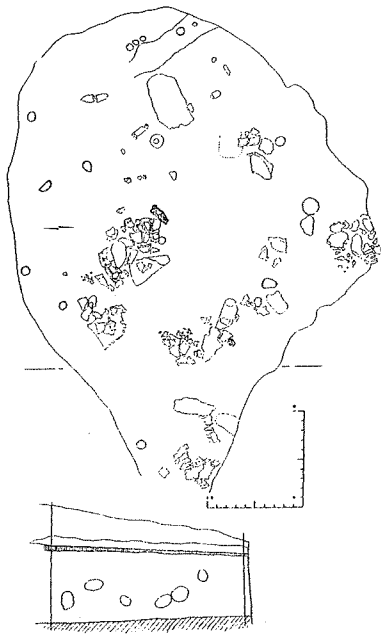


図10 稚内市泊内遺跡1号

6. 根室市弁天島西貝塚1号（山浦 1979）

根室港内にある周囲1kmほどの弁天島の中央部附近に位置する。壁の高さが40cmほどの竪穴である（図11）。幅は約3.5mであり、長さは、崖面の崩落によって一辺を欠くため不明だが、残存部分3.6mである。他の例を参考にすると、

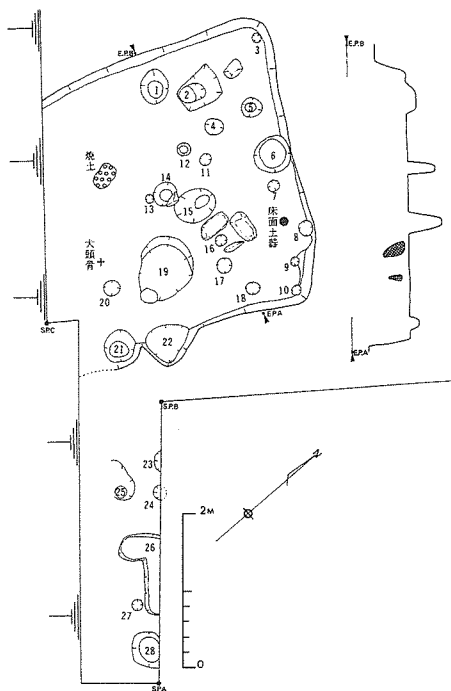


図11 根室市弁天島西貝塚1号

方形にちかい平面形であったと推測できる。柱穴は細いものが壁沿い散在する。中央より西にずれた位置に焼土が認められただけで、明確な炉や溝はない。

床面に伴った土器は1点だけであり、口縁部に円形刺突文をもつ。このようにデータははなはだ乏しいが、前期後半に属する可能性が大きい。

III 仮設竪穴住居の性格

ここでは、上記の竪穴²⁾と竪穴住居の関係を検討する。

香深井5遺跡におけるこの時期の魚骨層の欠如について熊木は、住居から離れた地点に廃棄されたためと理解し、調査区外にそれが存在することを予測した（熊木 2000:157）。すなわち香深井5遺跡では、香深井1遺跡について大井が提起し（大井 1978・1981）、小野が深めた（小野 1998a・b）モデル、すなわち竪穴住居建築・居住と魚骨層形成の単位が比較的狭い一定敷地内で完結的・反復的におこなれること、これはみられず、それとは別の上の「居住パターン」がみとめられるとした。その原因として熊木は香深井5遺跡では人口密度が相対的に低かったと推定できることをあげている。それはなぜであろうか？

香深井5遺跡の人口密度が低いことはその住居密度が低いことから明らかである。したがって空間的にゆとりがあるため、もしここでも竪穴住居単位の敷地の割り当てをおこなうとすれば、敷地の面積を大きくすることは可能であり、充分あり得たであろう。しかしその場合でも、住居単位で漁労活動を活発におこなっていれば、住居から遠く離れたところに日常的に魚骨などを廃棄することは考え難い。しかも魚骨のみならず漁網用の石錘も得られていないので、ここでは冬季中心の漁労そのものが低調であったこと、したがって生産性すなわち人口支持力がきわめて低く、人口もその密度も低くならざるを得なかったものと判断できる。

ところで熊木のこの議論は、そう明言しているわけではないが、香深井5遺跡の上記の竪穴が一般の竪穴住居であり、したがってそこが一般の集落であることを前提として組み立てられている。この前提は成立しうるであろうか？

香深井5遺跡では、既にみたように竪穴の長軸が基本的に海岸線に直交するのに対し、調査区が海岸線に沿って細長く設定されたこともあって、00-4号を除いて竪穴の規模がつかめた例がない。それでも幅は平均7.2mほどと推定でき、00-4号同様に長さが幅と同じくらいであったと想定すれば、方形に近い平面形と、50㎡前後の床面積を推定できる。この面積は、同時期の竪穴住居(川尻北チャシ2号、ウバトマナイチャシ)と比較すると、長さがあきらかに短いため、約1/2に過ぎない。しかし、オホーツク文化一般の竪穴住居の平均面積72.74㎡を超えないものの、その中の比較的小形の住居の範囲に重なる。しかも最寄りの香深井1遺跡の住居址群と比べると、完全にその面積の変異の範囲内に収まることが注目される。つまり床面積のみを取り上げると、これら竪穴を竪穴住居と区別する理由はないことになる。さらにまた、これらが規模の割に深いこと、中央部に長方形の大形の炉を設置し、これを囲む粘土床をもち、全体として竪穴住居の様相を示す点は注目される。

しかしすでに指摘したようにこれらの竪穴は、壁沿いと長軸上に支柱(穴)を配置する構造を欠いている。このことは、それがいかに床面積の大きい竪穴式の建物であっても、上屋は細い材を寄せ集めた簡易な造りであったことを示す。すなわちこれらの竪穴は恒久的な居住を目的として造られた住居ではなかったのである。ただ山浦の提案した「小竪穴」という定義ではカバーできない規模のものが現れたので、以後これを「仮設竪穴住居」とよぶことにしたい³⁾。

結 論 (図12)

前期前半の時期、サハリン南西部“core area”に集落をもつオホーツク文化のあるグループは、香深井湾に現れて、香深井5遺跡左岸に97-4号や97-2号などの仮小屋を建ててここを利用し、香深井1遺跡でもごく小規模ながら魚骨層Ⅵを残す活動をおこなった。その魚種ではニシンとホッケがめだち、マダラは多くないようである。大井がその可能性を指摘したように、この魚骨層Ⅵには家畜であるイヌやカラフトブタがみられないので、ここにおける生活は非定着的であったろう

(大井1981:291)。モネロン島ではキタコタンなどでもう少し早くにこのような利用が始まっている。

前半後半にはオホーツク人たちは、香深井5遺跡右岸地点に移って仮設竪穴住居を建てて、冬季にも海獣猟などをおこなうようになった。香深井1遺跡も引きつづき利用し、散漫ながら魚骨層Ⅴを形成している。注目すべきはここにはイヌやカラフトブタが認められることである(西本1981:264-265)。その魚種にはニシンを主としホッケ・マダラなどがみられる。冬場をふくむ漁労にもとづく定着化のきざしがうかがえる。しかしおそらく本拠は依然としてサハリンの南西岸の母村におき、適時そこに戻る行動を年々繰り返したのであろう。

なおオホーツク海側では、すでに川尻北チャシに竪穴住居を建設して新たな集落を創設するグループが現れている。サハリンのデータがなお充分でないためにこれ以上の議論を出来ないが、このグループは後に香深井1遺跡に集落を拓く南西海岸グループとは別もので、アニワ湾岸のものである可能性が大きい。

この時期オホーツク人たちの領域拡大行動はきわめて活発であり、日本海岸では天塩などに仮設竪穴住居を建てて進出を試みた。また焼尻島や浜益村岡島洞窟などを中継キャンプ地として利用しながらさらに南下を試みて、奥尻島に仮設竪穴住居を建てて拠点を築いた⁴⁾。他方オホーツク海側でも知床半島南岸辻中氏宅遺跡などを中継キャンプ地として根室半島に至り、仮設竪穴住居をもつ拠点を弁天島に設けた。また詳細はなお明らかではないが、ベーリンスコエ遺跡などサハリン西海岸を北上する動きも見せた。

ついで前期後半末に香深井1遺跡に初めて竪穴住居(2号竪穴住居)を建設し、新たな集落を創設した。この時点で香深井5遺跡はほとんど利用する必要がなくなった。サハリン南西部の母村からの分村が起こったわけである⁵⁾。

なお中期には、おそらく系統的にもかなり異なる新たなグループが、空いていた香深井5遺跡に現れて、右岸に仮設竪穴住居00-3号を建てて暮らした。しかし前後との非連続性と資料の小密度・魚骨層の欠如からみて、これも定着的なものではなかったと考えられる。

つまり仮設竪穴住居はキャンプなどのような、地域内で通常に営まれるものではなく、新たな地域開発のときに前進基地として機能したものであり、冬場をふくめて通年的に利用された。しかしあくまで臨時の仮設住宅であり、定着の目処が立ち本格的な竪穴住居を建設した時点で廃棄された。繁忙期である冬季に母村とキャンプ、竪穴住居と仮設竪穴住居は両立しない性格のものであった。前期に仮設竪穴住居が多いのは、この時期にオホーツク人が積極的に領域の拡大につとめたからである。

註

- 1) 続縄文期鈴谷式の段階において、海岸段丘上の竪穴住居集落と海浜部の施設が使い分けられていたことは前田も指摘している（前田 2002:27）。
- 2) 浜中 2 遺跡ではオホーツク文化前期の土器が出土しており、6 号竪穴はこの時期の住居とされるが、詳細は明らかではない（前田・山浦 1992:53-54）。成人女性を葬った I-3 号墓もこの時期のものである（前田・山浦 2002:50）しかし小野も指摘しているように（小野 1998a:25）、この時期の冬季中心の漁労活動を示す資料は得られていない。ここでは 中期以前には定着的な集落は形成されていなかったと判断

できる。

- 3) なお山浦は、「骨塚」を欠くことを氏の「小竪穴」の特徴の一つに挙げている（山浦 1979:50）。しかし川尻北チャシ 2 号竪穴住居につづいて、それよりやや遅れるもののやはり前期に編年出来るウバトマナイチャシ竪穴住居にも骨塚が認められなかったので、竪穴住居内に動物の頭骨などを祀る儀礼の体系自体がこの時期前期後半にはなお確立していなかった可能性が大きいと考えられる。その直後、前期末香深井 1 遺跡 2 号竪穴住居にはその体系が整い始めた様相をみることができる。
- 4) 青苗砂丘遺跡についてご教示頂いた木村哲朗氏（奥尻町教育委員会）、種市幸生氏・越田賢一郎氏（北海道埋蔵文化財センター）に感謝します。またこのオホーツク集団の南下と続縄文集団の関係について既に述べたことがある（天野 2002）。
- 5) 大井は、香深井 1 遺跡における定着的集落の形成が魚骨層 VI にまでさかのぼる可能性を示唆した（大井 1981:521）。筆者は香深井 1 遺跡における鈴谷グループの先住権を考えるので（天野 1998）、家畜を含む魚骨層 V の段階はともかく、VI の段階にオホーツク人の定住を想定することは困難である。調査と研究の進展に待ちたい。

時 期	サハリン	香深井 5 遺跡	香深井 1 遺跡	日本海岸	オホーツク海岸
中期		00-3号			
II 前期後半			魚骨層 IV		
		00-4号	2号竪穴住居	青苗H-1号	
				天塩A-3号	
	A-リンスII	00-5号		天塩B-1号	泊内 1 号 カトマナイ 川尻北 2 号
I 前期前半			魚骨層 V		
		97-2号	魚骨層 VI		
		97-1号			
		97-4号			
	モロシタナ?				

凡 例

仮小屋 ———

仮設竪穴住居 []

竪穴住居 []

図 12 オホーツク文化前期の地域開発

引用文献

- 天野哲也 1979「オホーツク文化の展開と地域性」『北方文化研究』：75-92
- 天野哲也 1998「オホーツク文化の形成と鈴谷式の関係－礼文島香深井遺跡群を中心として－」野村 崇先生還暦記念論集『北方の考古学』：367-381
- 天野哲也・小野裕子 2002「オホーツク文化の形成－「十和田式」をさかのぼる－」天野哲也・Vasilevski A.A. 編『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅』：115-118
- 天野哲也 2002「クマ送りとクマ贈り（ギフト）」、佐伯有清編『日本古代中世の政治と宗教』：202-216
- 荒川暢雄編 1997『北海道礼文町香深井5遺跡発掘調査報告書』、礼文町教育委員会
- 泉 靖一・曾野寿彦編 1967「オンコロマナイ」『東京大学人文科学科紀要 42 文化人類学研究報告』1
- 右代啓視他 1998「枝幸町ウバトマナイチャシ第1次発掘調査概報」『北の文化交流史研究事業中間報告』、北海道開拓記念館：69-88
- 内山真澄・藤沢隆史・荒川暢雄編 2000『北海道礼文町香深井5遺跡発掘調査報告書』（2）、礼文町教育委員会
- 大井晴男 1978「オホーツク文化の社会組織」『北方文化研究』12：93-138
- 大井晴男 1979「オホーツク文化の竪穴住居址－環オホーツク海海洋漁労・狩猟民文化の成立過程についての一仮説－」『三上次男博士頌寿記念論集』：1-38
- 大井晴男 1981「XXVIII 魚骨層VIとその遺物」大場利夫・大井晴男編『オホーツク文化の研究 3 香深井遺跡』（下）所収：281-291
- 大井晴男 1981「II 香深井A遺跡におけるオホーツク文化期集落と礼文島を領域とする地域集団」大場利夫・大井晴男編『オホーツク文化の研究 3 香深井遺跡』（下）所収：499-529
- 大場利夫・石川 徹 1961『浜益村岡島洞窟』浜益村教育委員会
- 大場利夫他 1972『枝幸町川尻チャシ調査概報』枝幸町教育委員会
- 大場利夫・石川辰也 1964『浜益遺跡』浜益村教育委員会
- 大場利夫・大井晴男編 1981『オホーツク文化の研究 3 香深井遺跡（下）』
- 小野裕子 1998a「礼文島オホーツク文化の「地域集団」における浜中2遺跡の位置」上『古代学研究』142：1-21、『同』下143：20-29
- 小野裕子 1998b「道北オホーツク文化の「地域集団」の動態に関する考察－礼文島浜中2遺跡と香深井A遺跡の関係から－」『物質文化』65：17-33
- 小野裕子 2001「礼文島オホーツク集団のセトルメント・パタンを巡る問題」北海道考古学会 2001 年度定例研究会発表資料
- 加藤晋平・前田 潮・西田正規 1982『天塩町における考古学的調査』、天塩町教育委員会
- 河野本道 1964「天塩町川口基線遺跡の発掘調査資料報告」『アイヌモシリ』7・8、：22-48
- 熊木俊朗 2000「第7章まとめ」、内山真澄・藤沢隆史・荒川暢雄編『北海道礼文町香深井5遺跡発掘調査報告書』（2）、礼文町教育委員会：151-158
- 佐藤忠雄編 1964『稚内・宗谷の遺跡』、稚内市教育委員会
- 西本豊弘 1981「§ 6f. 魚骨層V出土の動物遺存体」、大場利夫・大井晴男編『オホーツク文化の研究 3 香深井遺跡（下）』：264-265
- 前田 潮・山浦 清編 1992『北海道礼文町浜中2遺跡の発掘調査』礼文町教育委員会
- 前田 潮・山浦 清編 2002「礼文島浜中2遺跡第2～4次発掘調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』13、筑波大学歴史・人類学系
- 前田 潮 2002『オホーツクの考古学』、同成社
- 皆川洋一他編 2002「奥尻町青苗砂丘遺跡」『重要遺跡確認調査報告書』2、北海道埋蔵文化財センター
- 山浦 清（北地文化研究会）1979「根室市弁天島西貝塚竪穴調査報告」『北海道考古学』15：35-56
- Горбунов С. В., Прокофьев М. М. 1994 *Археологические памятники острова Монерон. Южно-Сахалинск.*